

ミュージアム発足から携わってきて今思うこと（前半）

天岸祥光

このミュージアムが立ち上がるには、もちろん現在のNPO法人静岡県自然史博物館ネットワークが長年にわたって行ってきた運動「静岡県に自然史博物館を！」が土台になっているのですが、ここではミュージアム設立直前の4年間で大変な働きをした二人の県職員と一人の東大特任教授を前半であえて紹介したいと思います。

一人目は、小室桜子さんです。浜松の高校の生物の先生。自然史博物館に多大な関心を持っていたことから、勤務先の校長先生に見いだされ、平成24年4月付で、静岡県企画広報部政策推進班に配属されました。

ところが、初めに与えられた任務は博物館をつくることではなく、清水の静岡県自然学習資料センター（事実上NPOが管理していた）の移転だったのです。まだ博物館設置計画はタブーであったようで、その経緯と彼女の落胆はミュージアムAnnual Report 2015に詳しい。従って企画課でまとめた「静岡県自然学習資料センター整備方針」は博物館設置の基本方針にはとてもならない代物でした。私は、これではだめだと思い、博物館の「基本構想」を検討する委員会をまず設置するよう強く訴えました。この間の様子も同じ小室レポートに詳しいのでお読みください。

私は県庁に何度も足を運び、このことを訴えました。この私の訴えをじっくり聞いてくれたのが池谷 廣理事（政策企画担当）でした。池谷氏の努力で基本構想検討委員会設置要綱が県議会を通り、小室さんの念願でもある博物館に一気に向かうことになりました。早速平成25年7月に第一回基本構想委員会が開かれ、合計6回行いました。池谷氏と初代館長になる安田補佐官を中心に選ばれた10人の外部有識者の中にNPOからは柴さんと私が入ることになりました。何とんでも洪 恒夫東大総合研究博物館特任教授が入っていたのが我々のミュージアムの特徴を決定づけることになりました。

小室さんのレポートにも、こんなにワクワクする委員会は初めてだを書いてありますが、これからの博物館は資料をただ並べているのでは

ダメだ、考えさせ、興味を抱かせる工夫が必要だ、それにはどうしたらいいか、という議論で沸騰しました。

洪先生の主張は、実際長野県戸隠の小学校を改造した博物館で実証済のアイデアでした。旧静岡県立南高校の校舎を利用したの展示は部屋も小さいし、天井も低いので、神奈川県生命の星地球博物館や福井県の恐竜博物館などのダイナミックな展示はとても望めないのを逆に利用して、洪先生のアイデアでもあるミドルヤード展示、モバイルミュージアムなどを全面的に基本構想に取り入れました。基本構想ではまた我々NPOのバックヤードを中心とする役割も大いに期待されました。

さて、こうして「ふじのくに地球環境史ミュージアム」が平成27年（2015年）4月に開館し、初代館長として安田喜憲氏が就任しました。新ミュージアムを祝して静岡新聞2面にわたって川勝知事と新館長との対談が大々的に載りました。しかしこれを読んで、私はめまいがしました。他の自然史博物館には例を見ないNPOと研究員の組み合わせに基づく画期的なミュージアムのはずでしたが（我々の意識としては）、この2ページにも及ぶ対談記事には、NPOのNの字も出てきませんでした。

これで新館長がどの程度の問題意識を持って新ミュージアムに臨んでいるかがはっきりしたと同時に、我々NPOと研究員（初めは定員6名、スタート時点では5名）との関係を取り持つのが館長の最大の任務のはずでしたが、そのような気配は全く無く、ただいかに優秀な学問的に評価の高い研究員を集めたか、ばかりが自慢の館長でした（博物館の研究員としてどのような意識で臨んでいるかが重要なのですが、これについては後段で述べます）。

研究員としてミュージアムにやってきた我々が期待していた山田和芳氏が上記のAnnual Report 2015で「NPOの先生たちの貴重な意見やアドバイスが訊けない雰囲気が残念だ」と言った内容のことを述べてミュージアムを去っていったのは印象的でした。（つづく）